

②国際協力・交流等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
在外日本古美術品保存修復協力事業（修04）	保存修復科学センター	45
文化財保存施策の国際的研究（セ01）	文化遺産国際協力センター	46
アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究（セ02）	文化遺産国際協力センター	48
敦煌壁画の保護に関する共同研究（セ04）	文化遺産国際協力センター	49
陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究（セ03）	文化遺産国際協力センター	50
西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業（セ05）	文化遺産国際協力センター	51
諸外国の文化財保存修復専門家養成（セ06）	文化遺産国際協力センター	53

在外日本古美術品保存修復協力事業 (②修04-10-5/5)

目 的

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。平成3年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、平成9年度から工芸品など欧米の修復技術で修復の困難な分野にも協力対象を拡げた。

本事業では立案のために、欧米の美術館、博物館にて作品調査のほかに修復技術に関する討議を行い、併せて輸送手続きに関する協議を行っている。また、修復内容の検討、修復作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。

この修復協力事業が契機となって、国内外で所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、日本古美術品を所蔵する博物館の間でネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し効果をあげている。

成 果

平成22年度は、9館10点の作品(絵画4点、工芸品6点)を修復した。(うち4点(絵画2点、工芸品2点)が21年度からの継続、3点(絵画1点、工芸品2点)が海外での修復(◆印))。

〈絵画〉

(1) 「伯牙弹琴図屏風」	2 曲 1 隻	ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
(2) 「源平合戦図屏風」(裏面 竹に雀図)	6 曲 1 双	ベルン歴史博物館(2年計画の2年目)
(3) 「四季花鳥図屏風」(狩野松栄筆)	6 曲 1 双	ブルックリン美術館(2年計画の2年目)
(4) ◆ 「山水図」(曾我二直庵筆)	1 幅	ベルリン国立アジア美術館

〈工芸品〉

(1) 「菱繫文螺鈿筆筒」	1 基	国立ナールステク博物館(2年計画の2年目)
(2) 「花樹鳥蒔絵螺鈿筆筒」	1 基	アシュモリアン美術館(2年計画の2年目)
(3) 「螺鈿鶴形合子」	1 基	アムステルダム国立博物館
(4) 「花鳥螺鈿枕」	1 基	ライデン国立民族学博物館
(5) ◆ 「瀧蒔絵鼓箱」	1 合	ケルン東洋美術館
(6) ◆ 「折枝散蒔絵喇叭」	1 本	ライデン国立民族学博物館

平成22年度、絵画の事前調査はケルン東洋美術館で1館22点の調査を行った。加えて、欧米の各美術館、博物館に対して、修理が必要と思われる作品に関するアンケート調査を実施した。

また、平成21年度に修復した絵画、工芸品の修復状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。

報告書の刊行 1件

・『在外日本古美術品保存修復協力事業修理報告書 平成22年度(絵画/工芸品)』 163p 東京文化財研究所 11.3

研究組織

○川野邊渉、中山俊介、北野信彦、加藤雅人(以上、保存修復科学センター)、北出猛夫、高柳明、井手真二(以上、研究支援推進部)、中野照男(副所長)、津田徹英、勝木言一郎、塩谷純、綿田稔、江村知子、皿井舞、城野誠治(以上、企画情報部)、清水真一、岡田健(以上、文化遺産国際協力センター)

文化財保存施策の国際的研究 (②セ01-10-5/5)

本プロジェクトは、文化財の保存のための諸施策またはこれに関する国際協力を円滑に進めるための基礎となる国際情報の収集・研究と基盤づくりを大きな目的とし、これを制作面における文化財保護制度の比較研究（諸外国の文化財保護制度の研究）、情報交換・ネットワークづくりのための国際ワークショップの開催の二つの面から展開している。

諸外国の文化財保護制度の研究

目 的

諸外国または国際社会における文化遺産の概念やその保護の理念、政策、各種施策に関する最新の動向を常に把握し、分析し、情報を蓄積しておくことは、国内の文化財保護施策のさらなる充実に資するためにも、また日本が行う文化遺産分野での国際協力事業をさらにレベルアップして実りのある国際貢献を実現していくためにも重要である。本研究は、この観点から、諸外国あるいは国際機関の政策・施策レベルの動向に関する調査と比較研究を行うものである。

成 果

今年度は、世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。主なものは以下のとおり。

第34回世界遺産委員会（ブラジリア、7月25日～8月3日）

第2回日中韓建築文化遺産保存国際学術会議（奈良、9月3日～4日）

第12回世界歴史都市会議（奈良、10月12日～14日）

イクロム理事会（ローマ、11月4日～5日）

第8回アジアの建築交流国際シンポジウム（北九州、11月9日～11日）

ユネスコ無形文化遺産保護条約第5回政府間委員会（ナイロビ、11月14日～19日）

国際文化財保存修復研究会

日本国内への国際情報の発信と、国際協力に関する国内専門家の情報交換・連携強化を目的として、今年度は、日本国内への国際情報の発信と、国際協力に関する国内専門家の情報交換・連携強化を目的として国内向け一般公開の研究会として開催している。本年度は、「覆屋保存を考える」をテーマに開催し（日程：2010（平成22）年7月8日、場所：東京文化財研究所セミナー室）それに伴う報告書を刊行した（107頁を参照）。

アジア文化遺産国際会議

文化遺産の保存やその国際協力において、専門家や専門機関相互の連携は、情報の共有、保存理念の深化、施策や技術の向上、緊急の問題の解決のためなどにおいて重要である。アジア文化遺産国際会議は、アジアの文化遺産に関する各種の課題について協議するため、各国の専門家あるいは専門機関を招聘して行う国際専門家会議であり、アジア地域における文化遺産保存活動の普及啓発、専門家・専門機関ネットワーク構築に貢献するとともに、アジアから世界へ向けての情報発信の場となることを目指している。

文化遺産国際協力センターではこれまでアジアの専門家を日本に招聘して国際会議を開催することにより標記の目的を達成し、成果をあげてきた。この経験をもとに2006（平成18）～2010（平成22）年度の5カ

年計画では、会議の開催場所を海外に移してこれを地域ごとに開催することにより、これまでに蓄積されてきた経験を生かしつつ、より現実に即した情報の収集と課題の分析研究を目指した。初年度（2006年度）の会議を準備会合として東京で開催した後、2年目（2007年度）に中央アジア地域の会議をウズベキスタン共和国タシケントで、3年目（2008年度）に東南アジア地域の会議をタイ王国のバンコク及びアユタヤで、4年目（2009年度）に東アジア地域の会議を東京で開催してきた。

最終年度となる今回は、西アジア地域を対象として、「西アジアの文化遺産—その保護の現状と課題—」をテーマに、アラビア語圏にある5カ国、シリア、レバノン、ヨルダン、イラク、バーレーンの各国から、それぞれの文化遺産保護を所管する政府機関、文化遺産・考古学研究機関の文化遺産保護担当者を招聘して研究会を開催した。今回は各国で文化遺産研究・文化遺産保護の活動をしている日本の専門家にも参加を仰ぎ、「アジア」という視点からその文化遺産を捉え、その保護を考えた場合、日本はどのような協力活動を行うことができるのかという課題を設け、各国の現在の文化遺産保護の状況について認識を深めつつ、将来の共同について考えた。各国からは東京文化財研究所に対する大きな期待が寄せられた。

日程：2011（平成23）年3月3～5日

場所：東京文化財研究所セミナー室

参加人数：232人（3日間合計）

研究組織

○岡田健、清水真一、山内和也、友田正彦、朽津信明、二神葉子、有村誠、影山悦子、秋枝ユミイザベル、邊牟木尚美、島津美子、鈴木環、安倍雅史（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、今井健一朗（以上、客員研究員）

アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究 (②セ02-10-5/5)

目 的

アジア諸国では、煉瓦、土、石など、各地の遺跡に共通して用いられている材料が認められる。本研究では、地域で区切って研究を行うのではなく、各文化財に共通して用いられている素材を調査・研究することから、その素材で形作られた多くの文化財の保存修復に寄与することを目的とする。具体的には、材料の物性とその劣化に関する基礎的な研究を行うことから、それぞれの材料が劣化しにくい条件を考察し、材料に対して、あるいは遺跡の環境に対して、材料劣化を起こしにくい条件を与えることで、文化財の保存修復に貢献する。

成 果

昨年度までの研究により、覆屋を設けることが遺跡の保存に有効となる場合があることが定量的に指摘されていたが、今年度はさらに細かく覆屋の形態に注目し、覆屋のタイプの違いによりその効果がどのように異なるかを検証した。その結果、例えば凝灰岩と花崗岩とでは覆屋の効果が異なる（凝灰岩に対しての方が覆屋効果が概して大きい）など、遺跡を構成する材質ごとに状況が異なることがわかったため、まずは材質を正確に把握することが重要であることが確認された。こうした研究に関連した日本国内の現場を、共同研究を進めるタイ文化省芸術局や、インドネシア文化観光省の研究者とともに訪れることにより、研究成果を各機関で共有した。

海外の現場としては、タイ・スコタイ遺跡のスリチュム寺院において、温度・湿度・風速・風向・日射などの各種環境データを引き続き計測した。また、カンボジア・アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡において、砂岩石材表面に存在する地衣類について解析し、それが砂岩の風化に与える影響について引き続き検討した。同遺跡において砂岩試料に蘚苔類を繁茂させる現地実験では、既に表面に蘚苔類が繁茂した試料があり、そこでは実験開始前の初期値に比べて有意に物性値が低下していることが確認された。

報告書出版 1冊

『アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究 平成22年度成果報告書』

11.3

論文掲載数 3件

- ・ 朽津信明「越前式石廟に施された彩色装飾について」『考古学と自然科学』61 pp.17-26 10.6
- ・ Minoru NAKANISHI, Hiroyuki KASHIWADANI, Yoko FUTAGAMI and Kwang Hee MOON, "Nine Species of Graphidaceae (Ostropales, Ascomycota) Collected in Siem Reap, Cambodia" 『植物研究雑誌』85 pp.313-321 10.10
- ・ 朽津信明「日本における覆屋の歴史について」『保存科学』50 pp.43-57 11.3

発表件数 3件

- ・ 朽津信明「板碑に見られる彩色について」 日本文化財科学会第27回大会 関西大学 10.6.26
- ・ 朽津信明「遺跡の覆屋保存を考える」 第24回国際文化財保存修復研究会 東京文化財研究所 10.7.8
- ・ 朽津信明「石造五輪塔で見る岩種による風化速度の違い」 日本応用地質学会平成22年度研究発表会 島根県民会館 10.10.21,22

研究組織

○朽津信明、清水真一、二神葉子、秋枝ユミイザベル（以上、文化遺産国際協力センター）、鉾井修一、柏谷博之（以上、客員研究員）

敦煌壁画の保護に関する共同研究 (②セ04-10-5/5)

目 的

本研究は敦煌壁画に関して、東京文化財研究所と敦煌研究院が共同で調査研究を行うものである。日中共同研究の第5期（5年間）にあたる今期は、壁画の製作材料と製作技法を解明することを目的とし、各種の可搬型機器を用いた光学のおよび理化学的分析調査とともに、壁画の保存状態の確認を行い、壁画に用いられた材料や技法と劣化の状態を関連づけ、それから考え出される可能性を確認するため、新たな調査を加えるなど、研究自体が段階的に発展してきている。さらに¹⁴C年代測定による洞窟の年代同定とそれをもとにした壁画の比較研究を行うなど、敦煌壁画に関する包括的な研究を実現しつつある。

成 果

本年度は中期計画の最終年度であると同時に日中共同調査研究の5年目最終年度を迎えた。これまでの4年間に実施してきた調査研究についての成果をまとめるとともに、次期共同研究へ向けての準備作業を行った。とくに壁画の制作材料と制作技法に関する研究は、これまでに蓄積してきた劣化状態と色料に関する調査データをもとに劣化を生みだした環境要素のシミュレーション研究を行い、そこから壁画本来の色彩への考察を図ろうという計画をもった科学研究費補助金の申請が通り、研究の総括へ向けて明確な方向性を持つことができた。

- (1) 合同調査：2010（平成23）年8月14日～9月4日の日程で、現地調査を実施した。日本側の参加者は11名。2009年度に申請した科学研究費補助金「敦煌芸術の科学的復原研究―壁画材料の劣化メカニズムの解明によるアプローチ」（4年間）が交付されることになったので、本体経費としての南壁、西壁、北壁についての壁画の劣化状態、顕微鏡・蛍光X線等による壁画材料に関する補充調査を重点的に実施し、現状での調査研究の完成度を高めるとともに、科学研究費補助金による研究の中心となる洞窟内外の環境の変動と彩色の劣化との関係に関する現地調査も同時に行った。第5期共同研究の最終年度にあたり、この4年間の研究成果を発表し、総括に向けての準備を進めるとともに、次期共同研究に向けての展望を話し合うための研究会を、8月27日、敦煌研究院保護研究所で開催した。光学調査による北壁及び東壁の題記に関する新知見の報告、鉛同位対比の分析研究による研究発展の可能性に関する報告などが敦煌側に対する新たな情報として提供された。また科学研究費補助金による研究に関連して、壁画の内容に関する美術史的見地からの研究成果の報告と、環境シミュレーション研究の原理に関する報告も併せて行った。
- (2) 敦煌研究院保護研究所研究員の来日研修：2010年度は、前年度に予算の関係で敦煌側研究員の来日研修が実施できなかったため、前年度分の人数を含む研修を要望されていた。6月に3週間の日程で分析科学分野と環境分野で3名を招聘し、2月に科学研究費補助金による研究遂行のため、改めて環境分野1名を招聘し、京都大学において専門的内容による研修を実施した。
- (3) 学会発表：6月の文化財保存修復学会（岐阜市）で彩色材料・彩色技法研究、文化財科学会（吹田市）でデータベース研究、9月の日本建築学会（富山市）で環境シミュレーション研究と、それぞれ異なる内容での学会発表を行った。
- (4) 報告書の作成：2010（平成22）年度の成果をまとめ、東京文化財研究所と敦煌研究院両者共同の成果報告書を編集し、発行した（108頁を参照）。

研究組織

○岡田健、山内和也、朽津信明（以上、文化遺産国際協力センター）、高林弘実、佐藤香子、津村宏臣（以上、客員研究員）、中村俊夫（名古屋大学）、齋藤努（国立歴史民俗博物館）、鉾井修一、小椋大輔（以上、京都大学）

陝西省墳墓壁画の記録保存についての方法研究 (②セ03-10-2/2)

目 的

近年発見が相次いでいる中国陝西省の墳墓壁画は、建設工事など壁画保護を優先できない環境にあるため、そのほとんどがはぎ取り、考古研究所等への移動という対応が取られているが、発見直後の環境の変化に始まり、はぎ取り、移動のための処理によって破損や変色・褪色が発生している。貴重な壁画に関する情報をできる限り保存し、壁画の状態変化が最も少ない現場での調査実施と記録保存方法を構築することを目的として、日中で共同研究を行う。

成 果

2010年度は、前年度の調査実績をもとに墳墓壁画の考古発掘現場での調査実現を目指し、準備を進めたが、秋までの間に陝西省での壁画墓の発掘がなく、現場調査は実現しなかった。このため、前年度の作成した報告書の中国語版を作成し、西安市において陝西省の各機関の専門家を集めた研究会を実施し、調査手法についての評価を求めた。さらに壁画が出土してから文化財として保存されるまでの全工程において、どのような記録保存が求められ、それぞれの現場においてどのように現実的に対応するかを討論し、今後の共同研究についてその可能性を考えた。

(1) 陝西省考古研究院若手研究員の来日研修

共同研究へ若手研究員を積極的に参加させることを目的として、6月12日から7月5日の日程で、陝西省考古研究院助理研究員邵安定氏を招聘し、共同研究の内容・意義についての理解を深めさせるとともに、文化財に応用される理化学研究全般にわたる基本的技能を習得させた。また高松塚古墳壁画修理施設、奈良文化財研究所等の施設見学の他、奈良、京都の世界遺産地を視察して日本の文化遺産保護の理念と方法について理解を図った。

(2) 調査計画の立案

8月中旬に5日間の日程で陝西省涇南地区の唐時代壁画墓を調査する計画を立て、準備を進めた。しかし、陝西省側の都合により調査が取りやめとなり、以後秋季にかけては壁画墓の発掘がなかった。12月以降になり4ヶ所程の壁画墓が発見されたが、厳冬期に入り、調査体制が作れず、今年度の現場調査を断念した。

(3) 2009年度報告書中国語版の作成

2009年度報告書の全文を中国語へ翻訳し、陝西省考古研究院と共同で校訂を行って中国語版300冊を作成し、陝西省を中心とする中国の関係機関、専門家に配布した。

(4) 研究会の開催

2月14日、陝西省考古研究院で壁画の記録保存と修復技術に関する研究会を開催した。会議には陝西省考古研究院の他、西北大学文博学院、陝西省文物保護修復センター、陝西歴史博物館、西安師範大学、咸陽市文物保護修復センター、中国文化遺産研究院の専門家21名が参加し、会議を通じ今後より多くの機関と分野の専門家が参加して壁画保護の技術面での交流を促進していくことの必要性が話し合われた。同日午後、咸陽市文物保護修復センターの収蔵庫、修復室を視察し、とくに剥ぎ取り後の壁画の状況について観察を行った。

研究組織

○岡田健（文化遺産国際協力センター）、高林弘実、佐藤香子（以上、客員研究員）

2. イラク

イラク人文化財専門家を育成し、イラク人による文化財復興を支援する。本事業は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「バグダードにあるイラク国立博物館の保存修復室復興事業」と連携して実施した。

2-1. イラク文化財専門家研修事業：イラク国立博物館より3名（ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による招聘者2名）の保存修復家を招聘し、9月22日から12月9日にかけて「文化財の保存修復および分析調査のために使用される機器に関する研修」、「金属製品の保存修復研修」、「木製品の保存修復研修」を実施した。

3. 西アジア周辺諸国における文化遺産の調査研究・保護への協力等

3-1. トルコ：カッパドキア石窟壁画の保存修復にむけた基礎調査；6月19日から6月29日にかけて、カッパドキアに点在する石窟の保存状態に関する基礎調査を行った。ユネスコ、トルコ共和国文化省、国際

②国際協力・交流等 Area13

保存修復専門家との間で、今後の保存管理計画および必要とされる人材育成に関する意見交換を行った。

- 3-2. タジキスタン：タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の保存修復及び保存修復専門家の人材育成・技術移転；文化庁委託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業と連携し、壁画断片の保存修復を行うとともに、中央アジア関係諸国、ロシア、中国より専門家を招聘し、意見・技術交換を目的としたワークショップを開催した。また、報告書『タジキスタン国立古代博物館所蔵壁画断片の保存修復—2009年度』、『タジキスタン科学アカデミー歴史・考古・民族研究所アーカイブ、カフカハ遺跡群出土壁画』、『カライ・カフカハ I, II 遺跡出土壁画資料集 写真編 2』を刊行した。
- 3-3. インド：アジャンター壁画の保存修復；文化庁委託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業と連携して、インドのアジャンター仏教壁画の保存修復活動を実施した。壁画の保存状態記録を目的とした高精細写真撮影、自然科学的調査に基づく試験的なクリーニングなどを行った。また、『アジャンター 第2窟、第9窟壁画 ドキュメンテーションと状態調査』（日英）、『Indo-Japanese Project for the Conservation of Ajanta Paintings, 2008』を刊行した。
- 3-4. エジプト：JICA受託「エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズ1）」にかかる国内支援業務。
- 3-5. アルメニア：文化遺産国際協力コンソーシアムの協力相手国調査と連携して、2月7日から13日にかけて、アルメニア文化省と関係機関の担当者と面談し、今後の協力事業の可能性について意見交換を行った。

4. 国際会議等への参加

- 4-1. 「International Scientific-theoretical Conference “Preservation of Historical and Cultural Heritage: Theory, Practice and Collecting”（2010（平成22）年10月12日、於タシュケント、ウズベキスタン、出席者：山内和也、前田耕作）。
- 4-2. 「International Research and Practice Conference “Eurasia Ancient and Medieval Urbanization: Origin, Development and Age of Almaty City”」（2010（平成22）年11月17日、於アルマティ、カザフスタン、出席者：山内和也）。

研究組織

- 清水真一、山内和也、朽津信明、有村誠、影山悦子、島津美子、邊牟木尚美、鈴木環、安倍雅史、中村寛（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、谷口陽子、松岡秋子、松田泰典、藤澤明、伏屋智美、末森薫、高林弘実、（以上、客員研究員）、杉山洋、森本晋、石村智、田代亜紀子、脇谷草一郎、田村朋美（以上、奈良文化財研究所）、中村俊夫（名古屋大学）、津村宏臣（同志社大学、客員研究員）、増田久美（増田絵画修復工房）、佐藤由季（絵画保存修復家）、岡田靖（東北芸術工科大学）、笹岡直美（立正大学）、田川新一郎（箭上文化財修復）、片岡太郎（東北大学）、ファビオ・コロンボ（絵画保存修復専門家）

諸外国の文化財保存修復専門家養成 (②セ06-10-5/5)

目 的

諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。

成 果

(1) 研修用テキスト作成

文化財の保存修復の研修に活用するための教材として、出土金属の保存処理に関するテキストを作成した。本テキストでは、考古学的遺跡から出土した金属製遺物（鉄および銅製品）について、遺物を構成する素材やその劣化メカニズム・症状などを紹介したうえで、現場からの取り上げと仮保管に続き、適切な保存処理方法について、事前調査から、洗浄、処理、復元、保管・管理といった一般的な流れに沿って解説している。なお、処理実例の紹介等においては、東京都埋蔵文化財センターから資料提供、撮影協力を受けた。テキストは、海外専門家を対象とする研修等で使用することを想定し、日本語版と同一内容の英語版とを作成した。

(2) 研究会の開催

海外の保存修復専門家養成を目的とした研修については、カリキュラム作成をはじめとする研修計画立案と具体的な実施の両面において、手法的確立がなされておらず、この点に関する実施機関相互における情報交換・共有もあまり行われていないのが現状である。このような観点から、国内外の研修実施機関から担当者を招聘した研究会を開催した。各機関が実施している研修の内容と実施上の課題等を紹介するとともに、課題解決等に向けて活発な意見交換を行った。また、今後の参照に供するため、研究会の全内容を収録した報告書を日本語・英語の2カ国語版で作成した。

- ・「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」

日 程：2011（平成23）年2月2日（水）～3日（木）

発表者：山内和也（東京文化財研究所）、杉山洋（奈良文化財研究所）、岡田健（東京文化財研究所）、張可（中国文化遺産研究院）、朴鐘瑞（韓国国立文化財研究所）、カトリーナ・シミラ（ICCRUM）、パッチャラウィー・トゥンプラワット（SEAMEO-SPAFA）、園田直子（国立民族学博物館）

刊行物 3件

- ・『出土金属の保存処理』テキスト 東京文化財研究所 11.3
- ・『Conservation Treatment for Archaeological Metal Objects』 National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo 11.3
- ・『海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会』報告書 東京文化財研究所 11.3

研究組織

○清水真一、友田正彦、新免歳靖（以上、文化遺産国際協力センター）